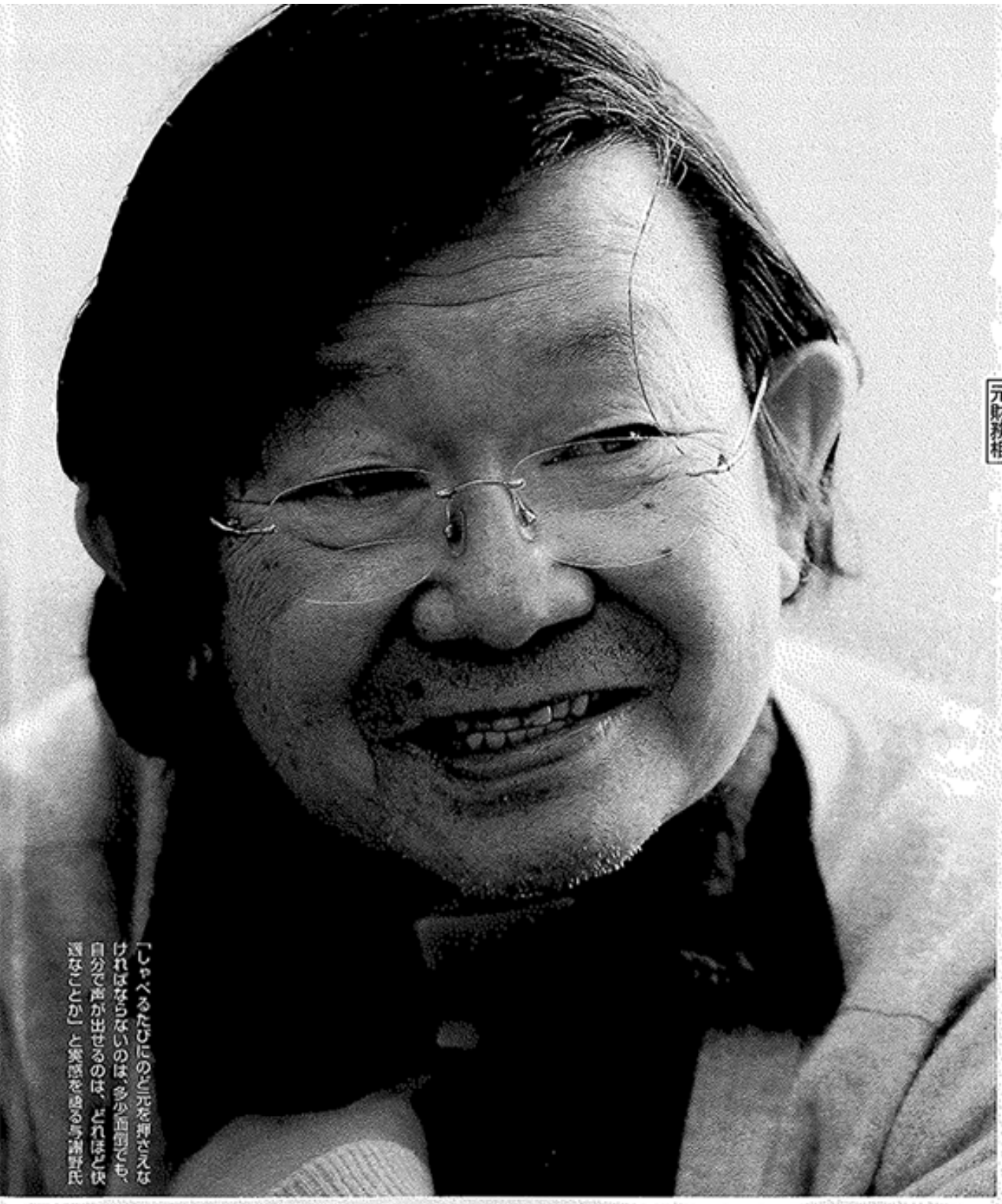
下咽頭がん壮絶な闘病生活を語る

与謝野馨 元財務相「私はこうして声を取り戻した」

取材・文＝青木直美（医療ジャーナリスト）



「しゃべるたびにのど元を押さえなければならないのは、多少面倒でも、自分で声が出せるのは、どれほど快適なことか」と実感を語る与謝野氏

「まさかこんなにラクに自分の肉声に近い声を出せる方法があるなんて、驚いたよね。やはり、声が出る、普通に人と大事な話ができるということは、何物にも代えられない貴重なことですよ。最近は長いテレビの討論番組にも出演できるくらいになった。自分では、前より少し声に渋みが出たと思うんだけど、どうかな」

笑顔でそう語るのは、元衆議院議員の与謝野馨氏（75）。のど元を親指で押さえながら発せられる声は、たしかに以前より野太い印象だ。下咽頭がんの治療の影響で、喉頭摘出手術を受けて声を失い、政治家を引退したのは、'12年9月に遡る。

「あの頃は思うように食事が取れず、げっそり痩せていまより10kg細かった。気道が狭くなって誤嚥性肺炎を繰り返し起こしていたので、結果的に、主治医の先生から喉頭摘出手術を勧められたんですよ。喉頭を摘出すれば、その代償として声を失うことになる。それは、一人の人間としてはもちろん、政治家としても進退を迫られるということ。どうにかがんは乗り越えたというのに、今度は自らの命と引き替えに、国会議員を辞す覚悟が要るというのだから、非情ですよ」

70代以上の患者にとって、肺炎は、時として命取りにもなる感染症の筆頭格だ。与謝野氏が並々ならぬ決意を持って